



## 歴史講演会 開催報告



市制施行60周年を記念し、日本古代交通史を専門とされる文化庁主任文化財調査官の近江俊秀さんを講師にお迎えして、古代の交通ルール～古代の人は道のどちら側を歩いたか？～をテーマにした歴史講演会を開催しました。

終戦直後の国会では、道路交通法案をめぐり「江戸時代の武士は道ですれ違うとき、刀が当たらないように左側通行だった、いや、道で抜刀しないように右側通行だった…」という議論が記録されています。この国会での議論があった昭和24年頃は、歩行者は左側を歩いていましたが、その理由はよく分からなかったようです。道路の成立や形状に関する研究や文献は多くありますが、利用者の視点からの研究は少なく、身近な疑問に焦点をあてた近江先生ならではお話しです。

古代から現在まで、道路の利用の様子が読み取れる文献史料、故実書や絵図、日記、道路遺構の痕跡などを解説していただきながら、時代をさかのぼり、学問分野を超えた様々な資料を俯瞰することで、人が道の

左右どちらを歩いたかといったルールの変遷を知ることができました。「道のどちら側を歩いたのか？」のふとした疑問を掘り下げることで、社会の変化に気づくことができる興味深い講演でした。

### 【講演後のアンケートより】

- ・絵図や文献など資料が豊富で分かりやすかった。
- ・一つの疑問から近世近代に至るまでの長い時代を見渡したスケール観のあるお話でとてもわかりやすくしていただき、たいへん勉強になった。
- ・その時代時代の時勢や背景、状況から道路に使用についての考えが変わるのはとても面白い。
- ・なにげない生活の習慣が、過去につながっていること、それがわかることがおもしろいとあらためて思った。

〔日 時〕	令和6年12月8日（日） 14:00～16:00
〔会 場〕	いずみホール Aホール
〔参加者〕	200人
〔プログラム〕	13:30 開場 14:00 開会 14:10 講演 15:50 質疑応答 16:00 閉会



近江俊秀氏



講演会風景

## 祝・来園者通算 20 万人達成！

平成21年10月18日にオープンし、令和6年に開園15年目を迎えた国分寺市立歴史公園 おたかの道湧水園（武藏国分寺跡資料館）の来園者数が、12月12日（木）に通算20万人となり、来園者20万人達成の記念セレモニーを行いました。井澤市長によりお祝いの挨拶が述べられた後、古屋教育長から記念品として文化財図書と年間パスポート、史跡の駅「おたかカフェ」の商品セット等が贈呈されました。

20万人目の来場者となられた方は、江戸川区にお住いで、半年前から趣味と勉強を兼ねて都立公園めぐりを始



来園者 20 万人記念セレモニー

めたそうです。この日も公園めぐりのひとつとして、おたかの道湧水園に来園されました。20万人目の来園者になったことについて「まさか自分が20万人目になるとは思っていなかったが、おめでたい記念に立ち合えてよかったです。長生きはするものですね。」と感想を述べられました。セレモニーの後、井澤市長、資料館学芸員の案内で、湧水園の庭や資料館を見学されました。

武藏国分寺跡資料館の窓口では、翌日から来園者20万人達成記念として、先着100名様にオリジナルクリアファイルを配布しました。市では、今後とも多くの来園者が訪れる場所になるように、歴史公園の整備、武藏国分寺跡資料館の活動を充実させていきたいと思っております。



資料館見学風景

## 令和6年度 秋季企画展開催報告

武藏国分寺資料館が開館15年目を迎えた令和6年10月18日から、秋季企画展「文化財保存館の歴史を振り返る15年目の蔵出し展」を開催しました。資料館の前身である「文化財保存館」から引き継いだ資料を公開するとともに、保存館とゆかりのある著名人を紹介することで、人々に親しまれ地域に根付いた施設であったことを知っていただけたと思います。来館者からは、常設展示では紹介されていない縄文時代の石器や、石皿、石棒などに注目が集まりました。



石器の展示（縄文時代）



石棒・石皿など（縄文時代）



史跡ガイドボランティア向け内覧会

## 国分寺市の民具 君は養蚕火鉢を知っているか！？

両角 まり（練馬区立 石神井公園ふるさと文化館）

## [養蚕火鉢とは]

養蚕火鉢は、文字通り、養蚕に使われた火鉢です。蚕は摂氏25～28度ぐらいで最もよく育つので、春や秋などの涼しい時期には部屋を暖かくして育てたのです。火鉢というと一般的には、径も高さも30cmぐらいの丸みを帯びた陶器をイメージすると思います。

しかし、養蚕火鉢は径が60～70cmほどもある大型の素焼土器です。使い方は普通の火鉢と同じで、灰を入れ、炭で暖をとります。蚕部屋の広くて大きな空間をまんべんなく暖めるために使ったようです。

## [民具の養蚕火鉢]

明治時代後半以降、国分寺市域でも多くの農家が養蚕を営むようになりました。そのうちの一軒、光町の農家に、使われなくなった養蚕火鉢が残されていました。直径60cm、高さ21cm、重さ約15kg、炭素を吸着させて黒光りするように仕上げた瓦質の土器です（写真1・2）。相対する2か所に獅子頭を模した把手が付いていて、胴回りには斜線のような文様がめぐらされています。中をのぞいてみると、底が抜いてあって、蓋のようなものが掛けられているのが最大の特徴です（写真3・4）。



写真1 養蚕火鉢とともに 長屋門にて

とても大きく重いので  
1人で運ぶ  
のは難しい



写真2 獅子頭の把手。反対側にもう一つある。お獅子の口のところには金輪が付いていたと考えられる。



写真3 上から見た養蚕火鉢

わざわざ穴が  
開けてある理由は…  
よくわからない

写真4 底いっぱいの大きさに穴が  
開けてあり、使うときは右  
の蓋のやうなもので塞ぐ。

